2023 年 12 月 7 日

94 歳まで 40 年間ネパール農業開発に捧げた近藤亨さんの思い出

長谷川 隆（元青年海外協力隊、ネパール 1981-83）

近藤亨さんは、新潟の加茂の出身で若い頃に肺を患い、戦争に行けず、自宅療養を何年もし、 それで文学の道を断念して、20 代前半で農林学校に入られた。果樹園芸を専門として地元の大学で教鞭を取られ、そして県の果樹振興に移られ、55 歳で JICA 国際協力事業団の果樹専門家としてネパールに派遣された。そして 70 歳まで JICA の大きなプロジェクトで葡萄、柑橘、栗の栽培振興に携われた。私は、新潟出身で近藤先生が教えられた大学で園芸を学び、そしてネパールに果樹栽培指導で青年海外協力隊として来た。当時は赴任地からカトマンズに出るたびに近藤先生に教えを乞いに自宅に伺い、またキルティプールの果樹試験場などに連れて行ってもらった。

近藤亨さんは JICA 専門家を 70 で定年となり、奥様から日本に帰ってゆっくりしましょうと言われたが、近藤さんはネパールで一番開発から見放され貧しい秘境のムスタンに残りの人生をかける大決断をされた。そして新潟の加茂の先祖伝来の田畑を家族親戚の反対を押し切って売 り、私財を投じてムスタンに農場を開かれた。94 で亡くなられるまでいつも、ネパールに骨をうずめるのだ、ネパールの一番貧しい、見放された地に農業開発という私の技術で捧げるのだ、その生きざまを見せるのだ、と言われていた。また戦争でアジアの国々に大変な迷惑をかけた日本はアジアにこそ支援しなければいけない、戦争を生き延びた自分がやらなければいけない、年寄りだからと日本でぬくぬくと生きてはいられない、と。

ムスタン地域開発協力会（ＭＤＳＡ）は、新潟を中心に日本全国に会員 1300 人を擁するに至った。私も大阪支部や東京で応援させていただいた。近藤さんは 1 年に何度か全国の支援団体を訪問しては報告会を開き熱弁をふるっていられた。そして現地では、ヒマラヤ山腹の荒野を 150 人もの農場職員と一鍬一鍬開墾し、アンダームスタンのシャン、テニ農場計 45ha、寒冷 強風のアッパームスタンの標高 4000m のガミ農場に 200ha の農場を造成した。そしてムスタンの極貧の村々に計 17 校の小、中、高校を建設し、ガミ病院を開所、運営し、村々に道路を開いたのである。

15 年ほど前、私は当時近藤さんのムスタン地域開発協力会を少し支援していて、その活動を見学にポカラから 7 日間歩いて行った。河口慧海がチベットに仏教を学ぶために潜伏していたムスタン。そのヒマラヤ、ニルギリの麓にジョムソムがあり、近藤亨さんの農場があった。近藤さんは成功した養殖のニジマスを刺身にして振舞ってくれた。翌朝、ジョムソムの事務所から近藤さんが馬に乗り、ジョムソムの通りを颯爽と進む姿には驚くものがあった。農場では鶏の飼育、アメリカが失敗したリンゴ園の再生、そして 4 年間失敗の末に 5 年目で実らせた水田を見せてくれた。水稲は 標高が世界で一番高いところで収穫できて

ギネス記録になったそうだ。ムスタンは寂寥とした不毛の地のような所だ。水稲栽培はジョムソムのように標高が 2,743m と高く、ヒマラヤから 流れ下る冷たい水と寒い風が吹く土地では難しいものだったが、それを技術力で克服したのだ。

近藤亨さんはこの農場で実際にいろいろな農業をやって、やっと本当の農業の楽しさを感じた、と言っていた。近藤さんが私に、一番大変だったのはなんだと思う、と聞いてきて、なんだろうと思っていると、それは植林だよ、と言われた。植林は苗木を植えて花が咲いたり実がなったりしないが、ちゃんと水やりなど世話をしないと苗木は枯れてしまうのだろう。その世話をしっかり愛情を持ってやるように 150 人ほども雇っていたという村の教育も受けていない労働者に教えていくのは大変だったのだろう。またホルスタイン牛という乳量の多い品種を標高の高い地区で飼育できるようにもした。

私が訪問した時には、近藤亨さんの建てた学校を支援しようと学校給食を始めるために、女性が早期退職してムスタンにもう 1 年も住んでいると言っていた。また新潟から青年が近藤さんの活動を応援しようと 3 年ほども活動していた。 近藤亨さんは、気骨はあるが、発言が鋭いこともあるのかいろいろ非難する人もいたが、専門 家時代からの使用人などとても大事にしていて、そのままムスタンでも働いてもらっていた。JICA 専門家時代に近藤さん宅にお手伝いとしていた踊りがうまかったサンタさんは近藤さんを心から慕い、長年仕えて、最後は王家の人に嫁ぐこととなった。そしてその妹さんもムスタンで働き、近藤さんが亡くなった時には号泣していた。10 年ほど近藤さんのそばで支援していた日本人女性も近藤亨さんが亡くなられてとてもとてもさみしがられていた。

ジョムソム農場を訪問した際に、私に 5 年したらまたムスタンにいらっしゃい、と言われていたが再訪問はかなわなかった。

近藤亨さんのムスタンの短歌が朝日花壇に載っていた。

・力尽き群れを離れて舞い降りし 幼き鶴を胸に抱きぬ

7-8,000m のヒマラヤを鶴の群れが風に乗って超えて行く。時に越えられない小さい鶴がいて農場近くに舞い降りて来てしまったのだ。